

〔論文〕

アガサ・クリスティにおけるワグナー表象と 後期クリスティ問題（3）

富田雄一郎

- 〈目次〉
1. カランの疑問——クリスティの政治性
 2. 「ケルベロスの捕獲」から『フランクフルトへの乗客』へ
 3. クリスティの政治テキスト
 - 3-1. 『愛国殺人（いち、にい、私の靴のバックルを締めて）』
 - 3-2. 『アクナーテン』
 - 3-3. 『ナイルに死す』

1. カランの疑問——クリスティの政治性

『フランクフルトへの乗客』には原型ともいべきテキストが存在する。クリスティ研究家のジョン・カランが七十三冊にも及ぶクリスティの膨大な創作ノート「秘密のノートブック」を整理中に発見した「ケルベロスの捕獲（“The Capture of Cerberus”）」が、それである。元々は1939年から40年にかけて『ストランド・マガジン』誌に連載された短編集『ヘラクレスの冒険』——ヘラクレス（Hercules）の十二の難業を現代のヘラクレスたるエルキュール（Hercule）・ポアロが解決する連作短編集——の最後の逸話として書かれたものだが、出版社が政治情勢に配慮した結果、活字化されずお蔵入りになった。その理由をカランは「当時の政治状況と、セクション3の明らかにアドルフ・ヒトラーだとわかる人物造形が、掲載を拒否された主な（そして、たぶん唯一の）理由だったことに、疑いをさしはさむ余地はないだろう。」と推測している。⁽¹⁾カランはこの短編の執筆年を1939年と推測しているので、⁽¹⁾「当時」とはドイツ軍がポーランド侵攻に踏み切り第二次世界大戦が勃発した、まさに世界の動乱期ということになる。

確かに、物語内の独裁者がヒトラーをモデルとしていることは、その名こそ明示されないものの、「弾丸のような形の頭をした、黒いチョビ髭の小男」⁽²⁾という表現や「ナチ」⁽³⁾という単語から、誰の目にも明らかなように描かれている。なお、秘密のノートブックには「ヒトラー」⁽⁴⁾の文字が明記されている。また、冒頭からポアロが世界の動乱とヨーロッパの戦火を予測してためいきをつき、「平和を望む熱意に火をつけ、それを世界中に広めてくれる人間が登場しさえすればいいのに」⁽⁵⁾と平和への思いを吐露し、最後には、平和主義に転向した独裁者ヘルツラインの愛と平和を若者たちに期待する熱い演説に感情を高ぶらせるなど、戦争への意識が色濃く打ち出されている。つまり「ケルベロスの捕獲」とは、まさに同時代の政治情勢をリアルタイムに反映し、拡大しつつあった世界戦争に真っ向から反対の意を表明し、人類愛と

平和を高らかに讃美した、極めて政治的な物語なのである。結局、この短編が公表されることはなく、トーキーの別荘グリーンウェイ・ハウスで大量の手書き原稿やタイプ原稿といった書類とともに70年近くもの間、眠りにつくことになった。現在の『ヘラクレスの冒険』には同じタイトルの短編が収録されているが、それは新たに書き起されたものであり、内容は完全に別物で、ヒトラーを匂わせるような記述も皆無である。(以下、本論における「ケルベロスの捕獲」はすべて未発表バージョンのものを指す。)

新たに発見されたこの「ケルベロスの捕獲」について、カランはひとつの疑問を呈する。

クリスティがなぜこの短編を書くことにしたのかは、永遠にわからないだろう。彼女の作品のなかに、政治にとくに強い^テ関心^カを持っていたことを示す証拠は、これ以外にほとんど見つからないからだ。⁽⁶⁾ [ルビ筆者]

「ほとんど、というのは、少なくとも『フランクフルトへの乗客』というもうひとつの政治小説があるからだ。カランはおおよそ30年後に「ケルベロスの捕獲」が『フランクフルトへの乗客』として再利用されたと考えている。

『フランクフルトへの乗客』の出版後ほどなく、クリスティの作品をイタリアで翻訳出版していたモンダドーリ社のためにおこなわれたインタビューのなかで、クリスティは「政治には昔からまったく興味がありませんでした」と語っている。だったら、なぜ、描写を和らげて、名前を変えるだけにしておかなかったのだろうか?皮肉なことに、『フランクフルトへの乗客』の17章には、本短編の中心をなすアイデアが少なからず使われている。ひょっとすると、拒絶されて30年以上たってから、自分のアイデアをひっぱりだし、まったくべつの作品に挿入したとは考えられないだろうか。⁽⁷⁾

「彼女の作品のなかに、政治にとくに強い^テ関心^カを持っていたことを示す証拠は、これ以外にほとんど見つからない」とカランは言う。クリスティ自身、政治には興味がないと公言しており、世間一般にも、彼女は非政治的な物語作家であると認知されている。だが、果たして本当にそうなのだろう

か。30年の時を隔てたこの2つの政治的テキストは、クリスティの作品群においては、あくまで稀な変異種と捉えるべきなのか。本稿では、カランのこの疑問を軸としながら、クリスティのテキストの政治性について考察していこうと思う。

2. 「ケルベロスの捕獲」から『フランクフルトへの乗客』へ

まずは「ケルベロスの捕獲」と『フランクフルトへの乗客』の関係性を確認しておこう。カランは「『フランクフルトへの乗客』の17章には、本短編の中心をなすアイデアが少なからず使われている。」と言う。17章は「ヘル・ハインリヒ・シュピース」という章タイトルが付けられていて、シュピースという名のドイツ首相の口から若きジークフリートを旗頭とする世界的陰謀が語られる。敗戦が濃厚となった時、ヒトラーは密かにアルゼンチンへと脱出し、そこで後の若きジークフリートたるフランツ・ヨーゼフを産む。その際に逃亡の手段として使われたのが、誇大妄想狂患者が多く収容されている精神病院であった。当時そこには「24人のアドルフ・ヒトラー」⁽⁸⁾がいて、腹心の部下と共に病院を訪れたヒトラーは、そのうちのひとりに入れ替わる。そして後に、その患者、つまり入れ替わったヒトラー本人を引き取る形で国外に逃亡させるという計画である。「ケルベロスの捕獲」でも誇大妄想狂の集まる精神病院で入れ替わりが行われる点は全く同様である。収容されている患者の種類も、『フランクフルトへの乗客』ではヒトラーの他に、イエス・キリスト、全能の神、ナポレオン、ムッソリーニ、シーザーの名が挙げられているのに対し、「ケルベロスの捕獲」でもヘルツライン（ヒトラー）の他に、ポンドリーニ（ムッソリーニ）、ローズヴェルト、全能の神が出てくる。病院の所在地も、前者ではカールスルーエ、後者ではアルザス・ロレーヌ地方（「ストラスブールから8マイルほどの距離のところ」）⁽⁹⁾と、近い。カールスルーエはフランクフルトとアルザス・ロレーヌのおよそ中間地点で

あることも、『フランクフルトへの乗客』との近親性を強めている。ただし、「ケルベロスの捕獲」では、ヒトラーという名ではなく、アウグスト・ヘルツラインという名前に変えられていたり、独裁者ヘルツラインは自主的に患者と入れ替わったのではなく、神父の影響で改心して世界平和を希求するようになったために、好戦的な部下たちによって監禁されたのだということ、また国外逃亡もしていないなど、『フランクフルトへの乗客』とは大きく異なる点もある⁽¹⁰⁾。

だが、全体的な符合性から判断するに、「ケルベロスの捕獲」が30年後に『フランクフルトへの乗客』へと昇華されたというカランの説は正しいと言ってよい。ということは、1970年に書かれた『フランクフルトへの乗客』という政治テキストのルーツが大戦前夜に求められるということになる。問題は、その30年間に他にも政治的なテキストが書かれていたか否かという点になろう。カランの言うように、「ケルベロスの捕獲」と『フランクフルトへの乗客』は他には見られない例外的な現象だったのか。

3. クリスティの政治テキスト

3-1. 『愛国殺人 (いち、にい、私の靴のバックルを締めて)』

「ケルベロスの捕獲」と同じ1939年頃に書かれた『愛国殺人』を見てみよう。日本やアメリカでは『愛国殺人 (*The Patriotic Murders*)』として知られているが、本国イギリスでのタイトルは有名なマザー・グースから引用された『いち、にい、私の靴のバックルを締めて (*One, Two, Buckle My Shoe*)』である。各章のタイトルも歌詞からとられているうえ、事件の展開がマザー・グースの調べと重ねられていることから、一般的にはマザー・グース・ミステリとして認知されているが、実は、殺人の動機が独善的な愛国主義と深く関わっている点で政治テキストでもある。その意味ではアメリカ版の『愛国殺人』の方が物語に内包されている政治性をよく示している。

政治的な言及はテキストのいたるところに見られる。ファシズム（ヒトラー、ムッソリーニ、黒シャツ党）や Kommunismus を批判する発言を始めとして、ポアロが「血なまぐさいブルジョワ探偵！」と罵声を浴びせかけられるという「階級、を意識させるシーン」までである⁽¹¹⁾。しかしながら、とりわけ政治性が前景化されるのは、物語の終盤で犯人とポアロが対峙する場面においてである。犯人は自分が「破滅し、不名誉をこうむれば——国が、私の国が同様に大打撃をうけるのです。」⁽¹²⁾と述べ、ファシズムや Kommunismus からイギリスの自由を守るためにいかに自分が必要な存在であるかをポアロに向かって主張する。

「なぜなら、ポアロさん、私はイギリスのためにつくしてきた男だからです。私はこの国をしっかりと建て直し、負債を償却してきました。この国はそれゆえ、独裁政治——ファシズムや Kommunismus から解放されております。本当に、金のためだけに金をかせぐ苦労はしなかった。私はたしかに、権力を好む、支配することを好みます——しかし暴力政治は好まなかった。私たちイギリス人は、民主的ですよ——真に民主的国民です。われわれは不平をいったり自分の考えを述べたりすることもできれば、政治家を嘲笑することもできます。わが国民は自由なのです。それこそ私の愛したものであり——その自由を保つために私は全力をそそぎました——それが私の生涯の仕事ですから。しかし、もし、私がいなくなったら——たぶん、なにか事が起こるにちがいないのがおわかりでしょう。ポアロさん、私は必要な男なのです。」⁽¹³⁾

犯人は、自分が犯した殺人は民主主義と自由を守るために必要不可欠な愛国的行為であった点を強調する。だが、ポアロは被害者ひとりひとりの名を挙げながら命の平等性を訴える。

「われわれはみんな人間です。これをあなたは忘れていらっしゃる。あなたはおっしゃった、メイベル・セインズバリー・シールはばかな人間で、アムバライオティスは悪魔のような人間、フランク・カーターは屑——そしてモーリー——モーリーはたんに歯医者にすぎず、他にも歯医者はいると。そこがブランドさん、あなたと私の見地の一致せぬ点らしくみえます。私にとってはこの4人の人々の生命も、あな

たの命とまったく同じほどに大切なものだったのです」⁽¹⁴⁾

これに対し犯人は「あなたは間違っている」⁽¹⁵⁾と言り返すが、ポアロは続けてこう言う。

「いや、間違っておりません。あなたは天来の廉潔公正な方です。あなたはただ一歩だけ脇道に踏みこんだのです——それで表面はまだその影響はなに一つあらわれておりません。公けの面では、あなたは以前と変わらずに働かれてきた——高潔であり、信頼しうる、正直な人物として。しかしあなたの内部には権力への執着がどうしてもない高さにまで成長しているのです。ですからあなたには4人の生命を犠牲にしたにもかかわらずそれを取るにたらぬものと考えたのです」⁽¹⁶⁾

犯人は、自分という国家にとって必要な存在のためには、取るにたらぬ被害者の命を犠牲にするのもやむを得ないと信じて疑わない⁽¹⁷⁾。犯人の人間性の高潔さはポアロも認めている。だがしかし、清廉潔白な愛国精神も、独善的な方向に足を踏み外すとき、他者の尊厳を踏みにじる狂気と化すおそれがあるのだということを、この問答は物語っている。民主主義や自由という言葉の裏に隠された自己過信に基づく独善的愛国主義が、ここでは批判の対象とされているのである。『フランクフルトへの乗客』で自分たちの側の統率力に内在する危険性をも指摘していたことを彷彿とさせよう⁽¹⁸⁾。狂信的政治信条を扱ったテキストという意味では「ケルベロスの捕獲」にも通じる。

「ケルベロスの捕獲」との類似点は他にも指摘できる。物語は被害者となる歯科医モーレイとその妹の政治談議から始まる。

彼[モーレイ氏]は新聞にざっと目を通して、政府は無能状態から、ひどい白痴状態に移ったらしいと批評をした。

ミス・モーレイは太い低い声で、なんて恥しらずなことを、といった。

ごくありふれた婦人である彼女は、どんな政府であろうと、権力を握っている以上、きっと役に立つものにちがいない、と考えるたちの女だった。そこで政府の現在の政策のどこが、不安定でばからしく、無能で、率直に言えば自滅的なのか、はっきり説明して下さいと反問した。⁽¹⁹⁾ [[] 内筆者]

ここでいう「政策」とは、1938年9月のミュンヘン会談でネヴィル・チェンバレン首相らがヒトラーによるチェコスロヴァキアの領土譲渡要求を認めたことで頂点を迎えたと言われる「宥和政策」のことを指すと思われる。また、小説の最後では、犯人が逮捕された後、ポアロが若者たちに向かって、「世界はいまやあなた方のものです。新しい天地、あなた方の新しい世界に、どうか自由と憐れみが残りますように……私のねがうことはそれだけですよ」⁽²⁰⁾と語りかける。『愛国殺人』は政治談議に始まり、若者たちによる愛と平和と自由の実現を願う宣言⁽²¹⁾で終わるわけで、これは、ポアロのためいきから始まり、「平和……愛……兄弟愛……若者が世界を救う」⁽²²⁾という新生ヘルツラインの演説でエンディングを迎える「ケルベロスの捕獲」の構図とよく似ている。つまり、『愛国殺人』は「ケルベロスの捕獲」と『フランクフルトへの乗客』のどちらとも共通性を持った政治テキストだということになり、「ケルベロスの捕獲」と『フランクフルトへの乗客』は孤立した存在などではないということになる。

3-2. 『アクナーテン』

「ケルベロスの捕獲」や『愛国殺人』より2年遡ること1937年に執筆された、『アクナーテン (Akhnaton)』というひとりの政治家の没落を扱ったほとんど知られていない戯曲がある。古代エジプトの王アメンホテプ4世を主人公として、彼の理想主義に基づく政治が潰えるさまが描かれた政治劇で、ミステリ要素はない。

アクナーテンの政治とはどのようなものだったか。その特徴は主に2点、宗教改革と平和主義である。彼は代々王室が崇拝していたアメン神を中心とする多神教を、太陽神アテンを祀る一神教に改宗しようとした。⁽²³⁾それに伴い、「アメンがとどまる」という意味の「アメンホテプ」から「アテンの霊そのもの」という意味の「アクナーテン」へと改名する。⁽²⁴⁾というのも、アメンの神官たちは富と権力を手中に収め、民を虐げていたからだ。⁽²⁵⁾アテン信仰への宗教改革は、民を圧政から救済するという意味を持つのである。王は理

想の政治について忠臣ホルエムヘブに次のように語る——「ホルエムヘブ、私の夢について聞いてもらいたい。人々が兄弟姉妹のように睦まじく暮らし、平和な生活を楽しむことのできる国。属国はすべて自治を行うべく領土を返還され、神官の数は減じ、犠牲が捧げられるのは稀となり、王のかたわらには多くの側女の代わりに一人の正妻がいる。その女は見目うるわしく、そのあでやかさは数千年後の世の人々にまで語り伝えられるだろう……（ちょっと言葉を切り、声を低めて結ぶ）これが私の夢だ……」⁽²⁶⁾彼の夢は民のための理想主義的な政治を行うことであり、それは自由主義と平和主義に基づいている——「搾取のかわりに自由を人民に提供するのだ。自由と愛、そう、アテンの広大な愛が差し出されるのだ。」⁽²⁷⁾「私は彼らに死のかわりに生命を与えた。迷信の呪縛のかわりに自由を与えた。腐敗と搾取のかわりに美と真実を与えた。古き悪しき日々は終わりを告げ、アテンの太陽が昇ったのだ。人々は不安と圧制から自由になって平和と調和のうちに生きることができるようだ。」⁽²⁸⁾アクナーテンの夢想する理想の実現は難しいのではないかと、現実主義者であるホルエムヘブが忠言するも、⁽²⁹⁾アクナーテンは「きみは間違っているよ。愛と信頼こそ、全世界を一変させる2つの強力な武器なのだからね。」⁽³⁰⁾と言い返す。これに対しホルエムヘブは「愛とか、信頼といった資質を理解できない人々も世の中にはおります。」⁽³¹⁾と答え、ヒッタイト族がエジプト国内に侵攻を始めたことを報告する。彼は軍隊の派遣を王に迫るが、王は「暴力に暴力をもって対抗すれば、より多くの暴力が生まれるだけだ。」⁽³²⁾と言って聞かない。理想主義政治の現実からの乖離とその挫折が予兆される場面である。また、民衆の幸福のために断行した宗教改革も、誰からも理解されず、人々は「平和だの、善意だのっていう響きのいいご託を並べてさ」⁽³³⁾とアクナーテンを批判し、王の母ティイが予言したように「結局のところ、彼らは彼らがよく知っているものにもどって」⁽³⁴⁾しまう。最後には、王は毒殺され、その業績の全てを記録から消され、存在自体が抹殺される。こうしてアクナーテンの理想政治は失敗に終わる。

理想と現実の齟齬と、理想主義的平和主義の無力さが描かれたこの政治テ

クストもまた、「ケルベロスの捕獲」同様、上演されることも出版されることもなく、1973年まで眠ったままだった。その理由をチャールズ・オズボーンは「おそらく、侵略者に対し宥和政策をとろうとするのは愚行であるという見解が物語の中で示されていたためであろう。このような見解は1937年においては一般的なスタントではなかったのである。」⁽³⁵⁾と述べ、「反宥和政策というスタンス」⁽³⁶⁾にあったとみている。また、彼は『アガサ・クリスティの人生と犯罪』の中で、「アガサ・クリスティがこの芝居を、1930年代の敵対勢力による攻撃と宥和政策に対する見解として、すなわち、皮肉にもまた悲しくも平和主義の愚かしさを指摘する見解として理解されることを意図していたか否かはともかく、ファラオを巡るこの戯曲の中にそうした見解が埋め込まれているのは明らかである。」⁽³⁷⁾とも書いていて、ファシズムを扱った「寓話」⁽³⁸⁾だと解釈している。反宥和政策という点は『愛国殺人』にも繋がる。また、現実の政治状況を反映した寓話であるという点では『フランクフルトへの乗客』⁽³⁹⁾とも繋がる。さらに、平和への強い思い、理想が潰えたことを自覚したアクナーテンの感動的なまでの嘆きの独白は、平和主義に転向した独裁者ヘルツラインの演説を彷彿とさせるという点で、「ケルベロスの捕獲」⁽⁴⁰⁾にも繋がる。要するに、『アクナーテン』もまた、「ケルベロスの捕獲」と『フランクフルトへの乗客』の延長線上に位置づけることができるということになる。政治に関心がないどころか、クリスティは英国政府の政策批判とも読みうる政治劇を「ケルベロスの捕獲」の2年前にすでに書いていたことになるのである。

3-3. 『ナイルに死す』

『アクナーテン』よりも少し前に書かれ1937年に刊行された『ナイルに死す (Death on the Nile)』は、一般的にはナイル川を航行する豪華客船の船上で展開される異国情緒あふれるロマンティック・ミステリとみなされていて、一見すると、同じエジプトを舞台とした『アクナーテン』とは対照的に、戦争の足音の聞こえ始めたヨーロッパの政治情勢から逃避した、完全に

非政治的なテクストのようにも見える。著者自身、「著者の前書き」で「外国旅行物」「逃避的文学⁽⁴¹⁾」と呼んでいることから、確かにそうした面はあるのだろう。しかしながら、注意深く読み進めてみると、陸の喧騒から切り離された船上の、いわば異国のメイヘム・パーヴァとでも呼ぶべきクロード・サークルの空間にも、資本主義と社会主義の対立が忍び込んでいたことが見えてくる。それどころか、むしろ、『ナイルに死す』とは「資本、と政治、を巡る物語である」とすら言えるのである。

まず、被害者となる大富豪のリネット・リッジウェイは、登場シーンから資本主義の悪の象徴として位置づけられる。物語は酒場〈三冠亭〉の主人と客が、リネットがロールス・ロイスから降りてくるのを見ながら噂話をする場面から始まる。

「何百万ポンドって財産なんだぜ。あの家だけでも何万ポンドと注ぎこんでるらしい。プールもこさえるんだとさ。庭はイタリア式だって。家の半分はぶちこわして建てなおすそうだ。舞踏室もできるんだとさ⁽⁴²⁾」

さらに彼女は美貌も兼ね備えていることで彼らの反感を買う。

「金があるうえにあの器量ときちやあ……あんまり虫がよすぎらあ。そんなに金があるんだったら、あんな器量よしに生まれなくともいいじゃないか。そうはいうものの実にすごい美人だな。何もかも揃ってやがらあ。どうも、あんまり不公平だ⁽⁴³⁾……」

その後も、場面が変わるたびに、5万ポンドもの価値の真珠の首飾りや、財産目当てでリネットと結婚しようと考えている男の存在など、繰り返して「富」と結びつけられ、さらには「女王、(「リネット、あなたは女王よ。昔からそうだったわ。女王様、リネット女王、金髪のリネット女王」)⁽⁴⁴⁾」や「暴君、独裁者、(「あなたって暴君ね。そうでしょ。独裁者よ。そうだとはっきり認めなさい。お望みとあらば、恵み深き独裁者、だと言ってあげるわ」)⁽⁴⁵⁾」とすら呼ばれることで、彼女は富と魅力の結びついた権力の象徴となる。〈三冠亭〉の客が口にしてきた「不公平、という言葉も、船の同乗者たちによって、特に女流

作家サロメ・オッタボーンの娘ロザリーが羨望と軽蔑を込めて——「ずいぶん不公平だわ」⁽⁴⁷⁾、「一人の人間があれだけの幸運を手に入れるなんて、ちょっと欲が深すぎるような気がしたの。お金と、美貌と、素敵な身体つきと——」⁽⁴⁸⁾、「実際不公平だわ。持っている人は何もかも持っているし……」⁽⁴⁹⁾——何度も口にすることで社会問題化される。

さらに、富と不平等の問題は、マルクス主義者のファーガスンという男の出現により、資本主義と社会主義という政治的、イデオロギー的対立図式の様相をも帯びるようになる。彼はピラミッドのことを「傲慢な専制君主のエゴイズムを満足させるために建てられた、巨大な石の堆積にすぎない」⁽⁵⁰⁾と非難し、「ぼくは世のいわゆる芸術品なんかより、充分に三度の食事を食べてる労働者をでもながめたいですね。大切なのは将来ですよ——過去ではない。」⁽⁵¹⁾と言って「資本主義的組織」⁽⁵²⁾についての持論を語る。その上でリネットについては「あんな女は射ち殺して、他人のみせしめにすべきなんだ！」と「強い侮蔑の気持ちをこめて」⁽⁵³⁾叫ぶ。

他にも、横領を企てている「財産、管理人、高価な真珠の首飾りという「財宝」を狙う人物、彼女の父親のあくどい手法によって財産を欺し取られ恨みを抱いている人物などが登場し、⁽⁵⁴⁾資本を巡ってリネットと敵対する人々の姿が次々と浮き彫りにされる。極めつけはポアロによるリネット批判である。恋人を略奪したためにジャクリーンからストーカー被害を受けているので助けてほしいと頼まれたポアロは、「サムエル記」にある金持ちの男が貧乏人から1匹しかいない仔羊を奪った逸話を引き合いに出しながら、「あなたたちの事件はこれなんです」⁽⁵⁵⁾と言って、リネットの依頼を断る。

「あなたはあらゆるものを持っておられた。この人生で人の羨むすべてのものを持っておられた。ところが、あなたのお友達に人生の希望のすべてを1人の人間にかけていたんです。あなたはそれを知っておられたし、一時はためらいもされたが、しかし、手を引っこめようとはなさらなかった。そして、聖書の中の金持ちの男のように、手をさしのばして、⁽⁵⁶⁾貧しい者のたった1匹の仔羊を奪ったのです」

ここに示されているのは強者による貧者からの富の搾取という構図であり、リネットは搾取の主体として位置づけられる。この時の依頼を断るポアロの姿は、『オリエント急行の殺人』(1934)で悪人ラチェットの依頼を断る場面とも重なるだろう。⁽⁵⁷⁾ 敵の多いラチェットはいくらでも礼をはずむからとポアロに身辺警護を依頼する。だが、何度も望みの金額を提示するよう言われてもポアロは首を縦に振らない。ラチェットが「わたしの申し出のどこが気に入らないのです？」と聞くと、「あなたの顔が気に入らないのですよ」とだけ言って、席を立つ。ポアロにとっては、金の力にあかせて他人を自由に動かせると信じている点で、「尊大で」「威圧的な」⁽⁵⁸⁾リネットはラチェットと同類の存在に映ったのかもしれない。

クリスティのこの長大な小説において事件が起きるのは、物語も半ばに至ってからのことである。それまでは延々とこうした富(経済)、権力(政治)、闘争と没落、不公平、資本主義と社会主義のイデオロギー対立などに関する言説が繰り返し語られるのだが、この事件が実は偶発的ではなく計画殺人であり、愛情のもつれによるものではなく財産目当ての殺人だったことが明らかになったとき、『ナイルに死す』は略奪愛のメロドラマから資本の争奪戦の物語へと、すべてがアクロバティックに反転するコペルニクスの転回を遂げるのである。⁽⁶¹⁾ リネットにとって、ファーガスンがイデオロギー上の対立者であり、ロザリーが階級的或いは倫理的な敵対関係であったように、ジャッククリーンは三角関係の恋敵ではなく、同じ資本主義社会における経済的ライヴァルであったことが判明する。そして読者はそれまでの資本を巡る記述の意味に改めて気づかされる。富と権力と不平等を巡る記述が、被害者の皮膚に残された焦げ跡とピロードの肩掛けの穴の問題と同様に、盗まれた手紙のごとく目の前に提示されていたにもかかわらず真相に気づくことができないという、極めてクリスティらしい大胆な書き方がなされていたことに気づくのである。要するに、『ナイルに死す』とは、激情型メロドラマに見せかけた富と権力を持った搾取者の抹殺物語、つまりワグナーの『ニーベルングの指環』と同種の、資本を巡る闘争劇だったわけである。

以上見てきたように、「ケルベロスの捕獲」は唯一の政治テキストなどではなく、同時期のテキストに政治或いは政治的なものが積極的に——時には物語の根幹に関わる重要度をもって——扱われていたものがいくつもあることが明らかとなった。第二次世界大戦前後のテキストに特に政治性が色濃く打ち出されているのはある意味当然と言えば当然であるが、少なくとも、クリスティの物語がそうした面に注目して読まれることはこれまでほとんどなく、むしろ一般的には政治とは切り離されて読まれるのが主流であった。クリスティが「政治にとくに強い^ゴ関心^リを持^テっていた^カことを示す^ル証拠は、これ以外にほとんど見つからない」というカランの前提は、クリスティのテキストに対するそうした伝統的バイアスに由来するものだろう。「なぜ、描写を和らげて、名前を変えるだけにしておかなかったのだろう」という問いに対しては、変えたくなかったからだと答えたい。大戦期のクリスティのテキストにおいては政治的なものの記述が明らかに増大している。それはその後、様々な主題へと分岐し、様々な変奏のもとに展開されてゆくことになる。そして1970年の『フランクフルトへの乗客』へと至るのである。

(続く)

〔注〕

引用はそれぞれの原書のページと早川書房のクリスティー文庫の頁を併記してある。翻訳はクリスティー文庫のものを使用した^ゴが、必要に応じてルビを追加したり、表現を変えたりしている。

- (1) John Curran, *Agatha Christie's Secret Notebooks: Fifty Years of Mysteries in the Making* (Harper Collins, 2009), p.427 『アガサ・クリスティーの秘密ノート (上)』(早川書房, 2010) p.346. 一触即発という政治情勢において、ヒトラーを平和主義者に転向させたり、替え玉とはいえ暗殺したりと、時の独裁者を思うがままに料理した物語を公表することに出版社が尻込みしたのも無理からぬことではあるが、ただ、それが掲載を拒否された理由だとすると、同じ時期に出版された『愛国殺人』でヒトラーやムッソリーニが名指しで非難されているのに問題視されなかったのはなぜなのかという疑問が湧く。いずれにしても、クリスティがアクチュアルな社会問題に敏感に反応する作家であったこと

の格好の例でもある。

- (2) Curran, p.446. 『アガサ・クリスティの秘密ノート (上)』 p.376
- (3) Curran, p.440. 『アガサ・クリスティの秘密ノート (上)』 p.366
- (4) Curran, p.430-431. 『アガサ・クリスティの秘密ノート (上)』 p.351
- (5) Curran, p.433. 『アガサ・クリスティの秘密ノート (上)』 p.355
- (6) Curran, p.427. 『アガサ・クリスティの秘密ノート (上)』 p.347
- (7) Curran, p.430. 『アガサ・クリスティの秘密ノート (上)』 p.347-350
- (8) Agatha Christie, *Passenger to Frankfurt* (Harper Collins, 2003). p.272 『フランクフルトへの乗客』 (早川書房, 2004) p.310
- (9) Curran, p.442. 『アガサ・クリスティの秘密ノート (上)』 p.370
- (10) 「ケルベロスの捕獲」では、その後、影武者が演説中に暗殺されるよう仕組まれ、ヘルツラインの幕引きが自然に演出されるが、『フランクフルトへの乗客』に暗殺場面はない。精神病院に独裁者を隠すというアイディアは、チェスタトンが短編「折れた剣」(1911)で呈示した「木の葉は森に隠せ、の応用という趣向なのかもしれない——「そして、あなたを安全に隠しておける場所となると、ひとつしかありません——精神病院です——自分はヘル・ヘルツラインだと昼も夜も休みなく叫びつづけても、そうした発言がきわめて当然のこととみなされる場所。」(Curran, p.449. 『アガサ・クリスティの秘密ノート (上)』 p.380)。精神病院に身を潜めさせるというアイディア自体はすでに『アクロイド殺し』(1926)で使われている。
- (11) Agatha Christie, *One, Two, Buckle My Shoe* (Harper Collins, 2016). p.157 『愛国殺人』 (早川書房, 2004) p.241. 「反共主義」や「赤」などの表記も散見される。(One, Two, Buckle My Shoe. p.196. 『愛国殺人』 p.300)
- (12) *One, Two, Buckle My Shoe*. p.234. 『愛国殺人』 p.356-357
- (13) *One, Two, Buckle My Shoe*. p.234. 『愛国殺人』 p.357
- (14) *One, Two, Buckle My Shoe*. p.238. 『愛国殺人』 p.362
- (15) *One, Two, Buckle My Shoe*. p.238. 『愛国殺人』 p.363
- (16) *One, Two, Buckle My Shoe*. p.238. 『愛国殺人』 p.363
- (17) *One, Two, Buckle My Shoe*. p.235. 『愛国殺人』 p.357
- (18) 拙論「アガサ・クリスティにおけるワグナー表象と後期クリスティ問題 (2)」(『中央学院大学人間・自然論叢』第50号記念特大号, 2021)を参照のこと。
- (19) *One, Two, Buckle My Shoe*. p.1-2. 『愛国殺人』 p.9-10
- (20) *One, Two, Buckle My Shoe*. p.239. 『愛国殺人』 p.365
- (21) 最後にポアロが口にするマザー・グースの歌詞「じゅうく、にじゅう、私

- のお皿はからっぽだ」の empty は、迫りくる戦争のもたらすであろう様々な emptiness を予兆する言葉と読むこともできよう。
- (22) Curran, p.450. 『アガサ・クリスティーの秘密ノート (上)』 p.382
- (23) 一神教という〈積分〉原理批判でもある。
- (24) Agatha Christie, *Akhnaton* (Samuel French), p.32. 『アクナーテン』 (早川書房, 2004) p.50
- (25) 王の台詞「しかしこの国の禍根は何だ? アメンの圧制ではないか. それは人民を隷属させ, 貧しい者を搾取し, 流血と残虐によって肥えふとっている. (狂信的に) アメンの権力を徹底的に打破しなければならない!」(*Akhnaton*, p.91. 『アクナーテン』 p.164), 或いは王の母ティイの台詞「アメンの神官たちは富裕になり, たいへんな権力をたくわえているわ. (中略) 今のエジプトで本当に権力を握っているのはアメンとその神官たちなのよ」(*Akhnaton*, p.37. 『アクナーテン』 p.60) などを参照。
- (26) *Akhnaton*, p.23-24. 『アクナーテン』 p.35-36
- (27) *Akhnaton*, p.32. 『アクナーテン』 p.50
- (28) *Akhnaton*, p.59. 『アクナーテン』 p.101
- (29) 現実主義者ホルエムヘブによる理想主義者アクナーテンに対する度重なる忠言に反宥和政策の見解が示されていると読むことができる。
- (30) *Akhnaton*, p.90. 『アクナーテン』 p.161
- (31) *Akhnaton*, p.90. 『アクナーテン』 p.161
- (32) *Akhnaton*, p.90. 『アクナーテン』 p.162
- (33) *Akhnaton*, p.108. 『アクナーテン』 p.198
- (34) *Akhnaton*, p.40. 『アクナーテン』 p.66
- (35) *Agatha Christie: Official Centenary Edition, 1890-1990* (Harper Paperbacks, 1990), p.72
- (36) Charles Osborne, *The Life and Crimes of Agatha Christie: A Biographical Companion to the Works of Agatha Christie* (Harper Collins, 1999), p.155
- (37) Osborne, p.153
- (38) Osborne, p.148. 『アクナーテン』の中の「その帝国では日が沈むことがない」(*Akhnaton*, p.16. 『アクナーテン』 p.23) という台詞は大英帝国を容易に連想させるし, 冒頭で展開される外国人嫌悪の会話も当時のイギリスの情勢をアレゴリカルに表現したものと読むこともできよう。
- (39) アクナーテンの失敗は行き過ぎた〴〵統率力による失敗でもある。「どんな国でも一人の人間の思うままに任せられてはなりません. それ自体, ゆゆしいことです。」(*Akhnaton*, p.101. 『アクナーテン』 p.185) というホルエムヘブ

- の台詞や、「庶民には多くの神々が必要なんだわ。ただ一人の、絶対的な神ではなく。」(Akhnaton. p.71. 『アクナーテン』 p.126) という王の母ティイの台詞は、『フランクフルトへの乗客』における統率力批判、すなわち〈積分〉原理に対する批判にも通じる。
- (40) 「私が何ををしたというのだ、父よ？為政者がなすべきことで、私がせすにすませたことがあったらどうか？私が誰かに危害をおよぼしたと言うのか？私は貧しい人々を搾取したか？正義を否定したか？美を愛するのはゆるされないことなのか？平和を願うのは罪なのか？(中略) 私は人民を愛した。彼らに自由な空気を呼吸させ、愛と平和と幸福のうちに暮らさせたいと思った。それなのに、彼らは互いに殺し合い、盗み合い、騙し合い、大地を荒廃させた。なぜだ？なぜ、彼らはそうした挙に出るのか？」(Akhnaton. p.120-121. 『アクナーテン』 p.221-222)
- (41) Agatha Christie, *Death on the Nile* (Harper Collins, 2020), vii-viii. 『ナイルに死す』(早川書房, 2003) p.5
- (42) *Death on the Nile*, p.4. 『ナイルに死す』 p.18
- (43) *Death on the Nile*, p.5. 『ナイルに死す』 p.19
- (44) *Death on the Nile*, p.12. 『ナイルに死す』 p.31
- (45) *Death on the Nile*, p.20. 『ナイルに死す』 p.45
- (46) *Death on the Nile*, p.21. 『ナイルに死す』 p.46
- (47) *Death on the Nile*, p.49. 『ナイルに死す』 p.91
- (48) *Death on the Nile*, p.50. 『ナイルに死す』 p.92
- (49) *Death on the Nile*, p.129. 『ナイルに死す』 p.208
- (50) *Death on the Nile*, p.100. 『ナイルに死す』 p.166
- (51) *Death on the Nile*, p.101. 『ナイルに死す』 p.167
- (52) *Death on the Nile*, p.101. 『ナイルに死す』 p.167
- (53) *Death on the Nile*, p.151. 『ナイルに死す』 p.240
- (54) 「この船の船客の中に、自分の父親がリネットの父親にひどい目にあって、それをすごく根に持っている人間がいるらしいんですね。」(*Death on the Nile*, p.194. 『ナイルに死す』 p.305)
- (55) *Death on the Nile*, p.68. 『ナイルに死す』 p.119
- (56) *Death on the Nile*, p.70. 『ナイルに死す』 p.122
- (57) 『ナイルに死す』の舞台である豪華客船カルナック号は、中・上流社会の縮図であり、空間的に閉ざされているだけでなく階級的にも閉ざされた世界であるという点で、『オリエント急行の殺人』と相似している。
- (58) Agatha Christie, *Murder on the Orient Express* (Harper Collins, 2013),

- p.31. 『オリエント急行の殺人』(早川書房, 2003) p.57
- (59) *Death on the Nile*, p.61. 『ナイルに死す』 p.108
- (60) `melodramatic、という単語は本文中にも複数回出てくる. (*Death on the Nile*, p.84, 87, 365. 『ナイルに死す』 p.142, 146, 561)
- (61) 容疑者のうち確実に実行不可能だと思われていた2人の人物が犯人だったという衝撃的転回も鮮やかである. このはなれわざ的な転回の一部, すなわち動機の反転に`資本、が関係している点はもっと注目されてもいいだろう.